

**2023年度
一般社団法人 CIEC 定時社員総会**

議 案 書

2023年8月18日(金)
つくば国際会議場
(〒305-0032 茨城県つくば市竹園 2-20-3)

【2023 年度一般社団法人 CIEC 定時社員総会 議案】

第 1 号議案:2022 年度事業報告と 2023 年度事業計画承認の件	P3
第 2 号議案:2022 年度決算報告承認の件	
•財政報告	P6
•貸借対照表	P8
•損益計算書	P9
•計算書類の注記表	P10
•附属明細書	P11
•監査報告書	P12
第 3 号議案:2022 年度収支差額処分承認の件	P13
第 4 号議案:2023 年度予算承認の件	P14

【資料】

資料 1. 2022 年度活動報告と 2023 年度活動方針	P17
•専門委員会	
•部会	
•支部	
資料 2. 中期活動計画中間報告	P26
資料 3. CIEC 活動報告	P29
資料 4. CIEC 学会名称変更についてのメンバーズコメント	P32

2023年度一般社団法人CIEC定時社員総会議案書

議案1. 2022年度事業報告と2023年度事業計画承認の件

1996年7月に設立されたCIECは、2013年6月から一般社団法人CIECとして、設立以来の目的を引き継ぎながらこの10年間活動してきました。本議案では、2022年度の事業報告と2023年度の事業計画を提案いたします。

個々の専門委員会部会等の活動報告は、それぞれの委員会や部会報告等にゆだね、ここでは全体に関わる2022年度の取り組みの要点と2023年度事業方針について記します。

1. 学び、教育の革新をすすめる社会づくりへの発信

CIECは1996年7月にコンピュータ利用教育協議会として設立され、2013年6月に一般社団法人CIECとなり、教育と学びにおけるコンピュータおよびネットワークの利用のあり方を研究し、その成果を広く普及するとともに交流する活動を続けてまいりました。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大によりオンライン授業が一般化し、GIGAスクール構想による「1人1台端末」環境の整備が進むことにより、教育・学習環境が大きく変化しました。COVID-19が5類感染症に分類され、現在はポスト・コロナの対応、対策が取られていますが、それはコロナ前の状態に戻るのではなく、コロナ禍で得た様々な経験を、対面授業が基本になってきているこの時にこそ効果的に融合することにより、教育・学習の新たな展開が可能になると考えられます。また、2022年から急速に普及したChatGPTなどの生成系AIについては、国内外の様々な教育機関で公開されている生成系AIの活用情報にも様々な立場があり、今後どのように対応していくかはまさに議論の途上です。倫理的な観点、著作権などをはじめとする法的な観点など、様々な論点があり、今後CIECでも議論されることが望まれます。

CIECは、長年取り組んできたICTを活用した学びから得られた成果を社会に発信していくとともに、新しい情報技術とコミュニケーションの在り方を問い続けてきましたが、教育現場におけるデジタルトランスフォーメーション(DX)が加速し、教育・学習環境が大きく変わりつつある今こそ、CIECのミッション、ビジョンを再定義し、新しい一歩を踏み出していく時期に来ていると考えられます。そこで2023年度は、委員会、部会、支部の連携をさらに強化し、活動を活発化させることで、ICTを活用した学びに関わる情報交換・情報発信の場としてのCIECの魅力をアピールしていきます。

また、「教育改革のパイオニア」としてのCIECを再定義することを目的に、一昨年「CIEC中期活動計画」を決定しました。この2年、各ワーキンググループで課題を整理した上で、具体的な取り組みに着手してきましたが、それを踏まえ、今年度はさらにその取り組みを加速させ、課題となっている内容を整理していきます。具体的には、中期活動計画に基づいて学会名称変更についてワーキンググループで検討をすすめ、会長の問題提起というかたちで検討をすすめました。メンバーズコメントを実施した結果、CIECの活動ドメインの再定義ということをもふまえて学会名称の変更賛同する意見、現行のコンピュータ利用教育学会という名称の継続が望ましいという意見などがさまざまな理由等により出されました。さまざまな意見があることをふまえ、引き続き、今年度、学会名称の変更についての検討をすすめていきます。

2. PCカンファレンスをより一層充実した学びあいの場へ

「2022PCカンファレンス（以下、2022PCCとする）」は、当初つくば国際会議場での対面開催を予定しておりましたが、大会前にコロナ感染者数が急拡大したことを受け、企画主催者として、そのような状況下で企画を対面開催することは、参加者等の健康と安全を危険にさらす機会を増やし、全国的な拡大の抑制に反し拡大に加担しかねない、という公益的観点から、対面開催を断念し、オンライン開催へ変更（一部企画中止を含む）致しました。そして、2022PCCは、2022年8月11～13日に、全国大学生生活協同組合連合会との共催のもと、300名の参加で完全オンラインにより開催されました。

私たちの毎日というものはその日常がずっと続くように思い込んでいることが普通なのですが、新型コロナウイルス感染症のパンデミック、ロシアによるウクライナ侵略、など、想定外のことが起こった時そうで

はないのだと気づかされ驚いてしまいます。厳密にはその危険性はすでに専門家等からは指摘されているものではあり、私たちがそれに対する構えができていなかったとみるべきかもしれません。このような現代社会における学び・教育そのものもまた今までの延長であっていいわけではないでしょう。これまでアタリマエに思ってきたことを問い直すことが求められています。教育とは、人が学び成長することを支援することを通じて人類の未来に投資することだと思います。ですから、教育に関わる者は常に今まで大事にしてきたことの価値を問い直し、未来に求められるだろうことをビジョナリーに自ら探求することが求められるのではないのでしょうか。2022PCでは、学習・教育に関する様々なアタリマエを揺さぶってみて、これからの学習・教育をみんなで探求する機会の1つにできればという考えから、「学びのアタリマエを揺さぶる」を全体テーマとして、コロナ禍の中で私たちは何を学んだか、どんな実践を生み出したか、などについて学び交流するとともに、そもそもこれからの学習・教育のあり方を問い直す場としてのカンファレンスとなりました。

初日の基調講演では「学校と正反対の学びの場を作ってみたら」の講演が行われ、それを受けて、シンポジウム「教育のリセット」が行われました。分科会では、昨年から設けられたU-18セッションの12件を含む、65件の口頭発表がありました。U-18を対象にしたセッションは、春季カンファレンスで実施してきた経験が活かされています。また、オンラインでのポスター発表は43件で、討論の利便性を考慮し、60分ずつの2回の立ち合い時間を設けて実施されました。

「2023PCカンファレンス」は、つくば国際会議場で、8月17～19日に4年ぶりの対面での開催となります。全体テーマは、「変わる社会、変わる学習環境」です。コロナによってオンライン教育環境が一般化するとともに、GIGAスクール等により児童・生徒1人1人がタブレット等を活用して学ぶ環境も進んでいます。このようなテクノロジーを活用し学習者個人に適合した個別最適な学びの提供が追求されています。さらにChatGPT (OpenAI) などの汎用的大規模言語モデル (LLM) が公開され、教育現場での活用あるいは使用不可などの議論・対応が始まっています。私たちは学習する存在です。生まれたとき (いや生まれる前) から私たちは私たちをとりまく環境との相互作用を通じて学習し続けています。近代社会以降は、学校教育が制度化されて子どもの教育・学習機会を保障するようになりました。もちろん学校の外にも学びの場はあり、「遊び」を通じた学びにも目を向けることも大事です。最近では、スマホ・タブレットの利用接触時間が長くなっており、現代の子どもをめぐる学習環境としては無視できません。2023PCCでは、このように社会の変化に対応するように変化していく学習環境について考え学ぶ機会の一つにできたらと思います。

3. みんなが参加できる、成果を共有できる、専門委員会／部会／支部の活動の広がり

専門委員会は、研究委員会、会誌編集委員会、広報・ウェブ委員会、国際活動委員会の4つの委員会が理事会のもとに置かれています。研究委員会は、自らCIEC研究会の企画実施を担当するとともに、各部会等が開催する研究会の調整・管理を行っており、今年度も研究大会として「CIEC春季カンファレンス」を開催し、「CIEC春季カンファレンス論文集 Vol.14」を刊行しました。春季カンファレンスは、U-18セッションがオンラインで、口頭発表は対面での開催となりました。会誌編集委員会は、会誌『コンピュータ&エデュケーション』の編集を担当し、53号と54号を刊行しました。49号から、会誌編集に関わる作業の情報化を進めるために、オンライン投稿・査読システムを導入して編集作業が行われています。広報・ウェブ委員会はCIECの広報全般、特にウェブサイトの運営等に取り組み、会員への情報提供、社会への発信等を強めることを目的に活動しています。2022年度も、研究会、カンファレンスなどのオンラインイベントの開催を積極的にサポートしました。そして、2022PCCからは公式サイトの運営を担当しています。国際活動委員会は、国際活動の企画・運営を担当し、研究会の開催等を通じて情報提供をすすめております。2022年度は生協職員部会、小中高部会との共催で、「USAにおける教科書&図書館のデジタルシフトの状況・トレンド」というテーマで研究会を開催しました。

部会は、会員の自発的な組織として始まり、小中高部会、生協職員部会が活動を展開しています。小中高部会は関東、関西、北海道の3地区に拠点を拡大して活動をすすめ、PCカンファレンスでセミナーを企画開催するとともに、一昨年からの新たな試みである、小規模でインフォーマルな気軽に参加できる会としての「CIECサタデーカフェ」の開催が20回を超え、継続的に開催されています。生協職員部会は、学生の大学

生協の場を通じた学びに焦点を当て PC カンファレンスでセミナーを企画開催しました。2022 年度から「数理・データサイエンス・AI 教育研究部会」が設立され 2023PCC では小中高部会との共催でセミナーを開催する予定です。

支部は CIEC の地域組織で、各地域での会員の自主的活動の場として位置づけられます。現在、支部は北海道と九州の 2 つが活動しています。北海道支部では、オンラインにより 11 月に PC カンファレンス北海道を開催しました。2023 年度の PC カンファレンス北海道は、10 月あるいは 11 月に開催を予定しております。九州支部では、大分大学をホスト校として、九州 PC カンファレンスをオンラインで開催し、2023 年度も開催を予定しています。

4. 個人会員の拡充を図り、団体会員との新たな関係の構築に向けて

個人会員は本年度 679 名(2023 年 4 月)となりました。近年は個人会員数が減少傾向にありますが、これに歯止めをかけられるよう、引き続き個人会員の「参加」の場を広げていくとともに、PC カンファレンスや研究会等への未会員の参加を促進し会員拡大に努めます。

また、団体会員は 75 団体(2023 年 4 月)であり、関係の強化については、今後新たな共同のキャンペーンや研究プロジェクトの創設等、団体会員とのコラボレーションを追求します。

5. 広報、出版活動と「学会情報」の公開、発信にむけて

会誌への論文投稿も安定的に集まっております。会誌編集の進捗管理をオンラインで行う投稿審査システムを導入し、査読も確実に運営され、年 2 回の会誌発行を順調にすすめております。最新号を除く会誌は、J-STAGE で公開されており、最新号も発行の 6 か月後には公開されます。

また、Facebook、Twitter の CIEC 公式 SNS での情報発信を強化し、CIEC ホームページも内容も随時更新することにより、ニューズレターの他、各委員会、部会、支部からの情報発信が容易になっています。

さらに、CIEC について社会に発信すること、多様な会員の研究・実践の広がりが見える化等のために開始した会長発信企画「会長インタビュー」は CIEC ホームページの「Special」でこれまで 9 本の掲載を行い、その一部は、YouTube の CIEC 公式チャンネル(一般社団法人 CIEC)において、動画配信を行っています。今後、さらに充実させていく予定です。

6. 財政基盤の確立、事務局体制と役員選挙のあり方

近年、団体会員の退会が続いており、一般会員数も減少傾向が続いておりますが、特に COVID-19 感染拡大の影響による企業等の大幅な減収減益は、団体会員の動向にも、大きな影響を及ぼしつつあると考えられます。非常に困難な局面ではありますが、引き続き、更なる収入増対策を検討する必要があります。

教育に関心のあるさまざまな個人や団体、企業に会員になってもらい、CIEC の場を通じて学び、交流することで、個人会員、団体会員の拡大、政府や企業等との共同研究の推進等で収入増対策をすすめるとともに、経費対策をすすめます。

また、終身会員制度について、メンバーコメントの手続きを経て、永年会員への感謝と、学会活動への参加継続のため、終身会員制度の導入し、運用しています。

社員総会、役員選挙については引き続き電子投票制度を利用することにより経費削減を図り、CIEC の活動収支については厳密な運用管理と定期的会計報告と監査を受け、経費の透明性を確保し、税務当局への報告も明確にしています。また、D&I の観点からも女性役員の拡充に向けて努力しています。

日常的な CIEC 活動をすすめるために事務局は、副会長の中から事務局長を選出し、多くの事務を担当しました。2023 年度においても引き続き、メールによるコミュニケーションから、Slack などの新しいコミュニケーションツールの活用をすすめ、法人としての効率的な事務局活動を進めます。

以上

CIEC2022 年度財政報告

〔概況〕

2022 年度決算は経常利益が 616,039 円の赤字となりました。理事会や一部の専門委員会の会議、春季カンファレンス、研究会で対面開催を再開し、交通費や宿泊費で予算を上回る費用が発生しました。一方でオンラインを中心とした活動も続いており、支部活動援助金および部会活動援助金の多くは予算を下回っています。

また、2022PC カンファレンスの開催方法をオンラインに変更した際の欠損金を全国大学生生活協同組合連合会と折半し、「PCC 支援金」として 1,447,000 円を予算外で計上しました。

会費収益は個人会員数、団体会員の会費口数の減少により予算を下回りました。

(文中の金額は原則として 1 万円未満切り捨て。詳しくは損益計算書をご覧ください)

〔経常損益の部〕

I. 〔経常収益〕

1. 会費収益 986 万円／予算 1,050 万円

- 個人会員会費収入は 366 万円で予算対比 34 万円の減 (-8%)、団体会員会費収入は 620 万円で予算対比 30 万円の減 (-5%) となりました。

<会員状況>	2022 年 4 月 1 日	2023 年 3 月 31 日	2023 年 4 月 1 日
個人会員	665	708	679
団体会員	75	77	75

2. 財務収益 225 円／予算 2 千円

- 受取利息 225 円

II. 〔経常費用〕

1. 事業費用 676 万円／予算 663 万円

(1) 会議費用 122 万円／予算 85 万円

- 対面会議の再開により交通費等の経費が増加しました。

(2) 会誌発行費用 295 万円／予算 350 万円

- Vol. 53、Vol. 54 を発行しました。印刷費用が減少しました。

(3) 広報費用 0 万円／予算 14 万円

(4) 研究会費用 29 万円／予算 40 万円

- 春季カンファレンス及び第 129 回、130 回研究会を開催し、130 回研究会は対面で開催しました。
- 春季カンファレンス研究会論文集は PDF 版のみ発行しています。

(5) 調査費 0 万円／予算 0 万円

(6) 事業活動費用 23 万円／予算 20 万円

- 電子証明書費用と三役会議費用を計上しています。

(7) 支部活動援助金 32 万円／予算 61 万円

- 北海道支部 25 万円、九州支部 7 万円の実績です。支部からは支部交付金の支給基準に沿って「活動報告・会計報告」が提出されています。

(8) 部会活動援助金 21 万円／予算 67 万円

- 小中高部会 21 万円、生協職員部会の支出はありませんでした。

- ・ 数理・データサイエンス・AI 教育研究部会は2022年度部会交付金の申請がありませんでした。
- ・ 部会交付金の支給基準に沿って「活動報告・会計報告」が提出されました。

(9) 学会表彰事業費 6万円／予算6万円

- ・ 2022年度は学会論文賞2件の実績です。

(10) 教育出版費用 0万円／予算0万円

(11) 周年事業費用 0万円／予算0万円

(12) PCC 支援金 144万円／0万円

(13) 中期活動計画調査費用 0万円／20万円

2. 管理費用 371万円／予算387万円

(1) ネットワーク運営費 5万円／予算5万円

- ・ 保守管理業者委託費、サーバー更新料、ドメイン名登録更新料(お名前.COM/日本レジストリーサービス)の費用です。

(2) 事務局通信費 25万円／予算25万円

(3) 事務局業務委託費 300万円／予算300万円

(4) 事務用品費 3万円／予算15万円

(5) 備品購入費 0円／予算10万円

(6) 管理委託費 10万円／予算6万円

- ・ 会計システム費用、登記費用です。

(7) 雑費 25万円／予算25万円

- ・ 個人情報取扱事業者保険料、振込や自動引き落としなどの各種手数料が主です。

(8) 予備費 0円／予算1万円

(9) 租税公課 1万円／予算2千円

〔経常外損益の部〕

III. 〔経常外収益〕

雑収入 9万円／予算25万円

- ・ 春季カンファレンス参加費等です。

IV. 〔法人税等〕

7万円／予算7万円

- ・ 法人住民税7万円です。

V. 〔当期利益金〕

- ・ 18万円の黒字予算に対し59万円の赤字となりました。

以上

計 算 書 類

第 1 貸借対照表

貸 借 対 照 表

2023年6月30日現在

(単位：円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資産の部)		(負債の部)	
流動資産	22,108,625	流動負債	5,926,885
現金及び預金	22,108,625	未払金	157,885
		前受金	5,769,000
		負債合計	5,926,885
		(純資産の部)	
		その他	16,181,740
		正味財産	16,181,740
		繰越利益剰余金	16,181,740
		純資産合計	16,181,740
資産合計	22,108,625	負債・純資産合計	22,108,625

注) この表は、「一般社団法人・財団法人法施行規則による一般社団法人の各種書類のひな型 (改訂版)」(2015年5月7日 経済団体連絡会)に準拠して作成しています。

第2 損益計算書

損 益 計 算 書

(自2022年7月1日 至2023年6月30日)

(単位：円)

科 目	金 額	
(経常損益の部)		
I 経常収益		
1 会費収益		
1) 個人会員会費収入	3,663,000	
2) 団体会員会費収入	6,200,000	
	9,863,000	
2 財務収益		
1) 受取利息	225	
	225	9,863,225
II 経常費用		
1 事業費用		
1) 会議費用	1,229,282	
2) 会誌発行費用	2,954,678	
3) 研究会費用	297,398	
4) 事業活動費用	232,956	
5) 支部活動援助金	321,500	
6) 部会活動援助金	217,609	
7) 学会表彰事業費用	60,000	
8) PCC支援金	1,447,000	
	6,760,423	
2 管理費用		
1) ネットワーク運営費	55,121	
2) 事務局通信費	254,508	
3) 事務局業務委託費	3,000,000	
4) 事務用品費	36,229	
5) 管理委託費	106,494	
6) 雑費	255,489	
7) 租税公課	11,000	
	3,718,841	10,479,264
経常損失		616,039
(経常外損益の部)		
III 経常外収益		
1 その他経常外収益	93,247	93,247
IV 税引前当期純損失		522,792
V 法人税等	70,000	70,000
VI 当期純損失		592,792

注) この表は、「一般社団法人・財団法人法施行規則による一般社団法人の各種書類のひな型(改訂版)」(2015年5月7日 経済団体連絡会)に準拠して作成しています。

第3 計算書類の注記表

1. 重要な会計方針に係る事項に関する注記

①計算書類及びその附属明細書の作成基準

一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して作成しています。

②資産の評価基準及び評価方法

(1) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は税込方式によっています。

2. 損益計算書に関する注記

(1) 法人税等は当期の法人住民税が含まれております。

3. 金融商品に関する注記

(1) 金融商品の状況に関する事項

当法人は、運転資金はすべて自己資金でまかなっています。

未収金は、回収期間は1年以内です。

未払金は、事業に係る費用の支払であり、1ヶ月後に支払うものです。

前受金は、次年度の会費です。

(2) 金融商品の時価等に関する事項

2023年6月30日における貸借対照表計算額、時価及びこれらの差額は次のとおりです。(時価の算定方法については(注1)を参照)。また、重要性の乏しい科目については記載を省略しております。

(単位：円)

	貸借対照表計上額	時 価	差 額
①現金預金	22,108,625	22,108,625	-
資産計	22,108,625	22,108,625	-
③前受金	5,769,000	5,769,000	-
負債計	5,769,000	5,769,000	-

(注1) 金融商品の時価の算定方法に関する事項

①現金及び預金

預金はすべて短期であるため、時価は帳簿価格と近似していることから当該帳簿価額によっています。

②前受金

前受金はすべて短期であるため、時価は帳簿価格と近似していることから当該帳簿価額によっています。

附属明細書（計算書類関係）

主な資産および負債の明細

(1) 現金預金 (単位：円)


内 訳	金 額
現金	801,309
当座預金 ゆうちょ銀行	4,883,917
普通預金 りそな銀行	4,304,632
普通預金 中央労働金庫	2,118,767
定期預金 中央労働金庫	10,000,000
合 計	22,108,625


(2) 前受金


内 訳	金 額
次年度個人会員会費	2,889,000
次年度団体会員会費	2,880,000
合 計	5,769,000

監査報告

一般社団法人 CIEC（コンピュータ利用教育学会）

監事 鳥居 隆司 

監事 菅谷 克行 

監事 一瀬 欽也 

第10期事業年度（2022年7月1日～2023年6月30日）の事業報告、計算書類及び附属明細書、その他理事の職務の執行の監査について、次のとおり報告します。

1. 監査の方法及びその内容

定款及び監事が定めた監査方針に基づき、各監事は調査を行い、監査を実施しました。具体的には、理事会に出席し、会計帳簿、会計書類、理事会議事録等を閲覧し、当法人の理事等から、職務の執行状況等について報告を受け、また随時説明を求めました。

2. 監査の結果

- 1) 事業報告は、法令及び定款に従い当法人の状況を正しく表示しています。
- 2) 理事の職務の執行に関し、不正の行為又は法令若しくは定款に違反する重大な事実はありません。
- 3) 計算書類とその附属明細書は、当法人の財産及び損益の状況を全ての重要な点において適正に表示しています。

3. 追記情報

ありません。

以上

2022年度利益金処分案

I 当期末処分利益金	<u>16,181,740 円</u>
II 次年度繰越利益金	<u>16,181,740 円</u>

上記のとおり、2022年度利益金は次年度へ繰り越すことを提案いたします。

一般社団法人 C I E C (コンピュータ利用教育学会)
会長理事 若林 靖永

2023年度予算計画**I. [経常収益について] 1,060万円**

1. 会費収益 総額 1,060万円

- ・ 個人会員会費収入は 400 万円の計画とし、PCカンファレンス会場での新規加入増を見込んでいます。
- ・ 団体会員会費収入は PCカンファレンスでの「教育・ITフェア」「団体会員発表セッション」の企画で新規加入の機会増を図り 660 万円の計画としています。

2. 財務収益

- ・ 受取利息で 2 千円を計上します。

II. [経常費用について] 1,060万円

1. 事業費用 総額 673万円

1) 会議費用 87万円

- ・ オンラインでの会議開催を前提としますが、必要に応じて対面会議も実施します。
- ・ 総会費用は、12 万円を計上します。
- ・ 理事会は、8 月(1 回)、12 月、3 月、6 月の 4 回分をオンラインでの出席を前提とし、25 万円を計上しています。
- ・ 広報・ウェブ委員会はオンライン会議を前提とし、5 万円を計上します。引き続き各委員会、部会、支部の WEB 担当者の会議参加を呼びかけます。
- ・ 研究委員会は 20 万円を計上します。
- ・ 国際活動委員会は 5 万円を計上します。
- ・ 会誌編集委員会は 10 月、3 月開催の 2 回分 10 万円を計上します。
- ・ Zoom アカウント購入費用として 10 万円計上します。

2) 会誌発行費用 340万円

- ・ 12 月の 55 号、6 月の 56 号発行費用全体で 340 万円を計上します。(取材・送料込)。
- ・ 会誌発行費用には JSTAGE への投稿デジタルデータ作成費用 5 万円、オンライン投稿システム費用として 30 万円が含まれます。
- ・ またオンライン投稿システム費用の内訳は 129,600 円(年間サポート料) + 160,000 円(利用料@ 4,000 円×40 本程度)です。

3) 広報費用 10万円

- ・ HP 構築運用費として 10 万円を計上します。

4) 研究会費用 50万円

- ・ 研究会費用は 1 回上限 15 万円です。
- ・ 春季カンファレンスのタイムキーパー採用費、論文賞賞金、JSTAGE への投稿デジタルデータ作成費用等を計上しています。

5) 調査費用 0万円

- ・ 2023 年度は調査を行いません。

6) 事業活動費用 25万円

- ・ 三役会議は、15 万円計上します。通常の三役会議はオンラインで行い、対面会議は理事会と同日開催とし、臨時開催費用 1 回分を計上します。
- ・ 事業委託費(電子証明書費用)は 10 万円を計上します。

7) 支部活動援助金 61万円

- ・ 支部活動を保障する予算を 61 万円計上します。北海道支部 25 万円、九州支部 36 万円です。支部では地域を単位とした事業(地域 PCC、研究会など)を展開し CIEC 会員の参加の「場」を広げます。

- 8) 部会活動援助金 77 万円
・ 部会規約に基づき、定めた基準を満たす部会への援助金を 77 万円計上します。小中高部会 60 万円、生協職員部会 7 万円、数理・データサイエンス・AI 教育研究部会 10 万円です。
- 9) 学会表彰事業費用 3 万円
- 10) 教育出版費用 0 万円
・ 以前抜き刷り費用を別に計上しておりましたが現在は受取金額と相殺のため計上しません。
- 11) 周年事業費用 0 万円
・ 今期は計上いたしません。
- 12) PCC 支援金 0 万円
・ 今期は計上いたしません。
- 13) 中期活動計画調査費用
・ 中期活動計画具体化のための調査費用を 20 万円計上します。
2. 管理費用 総額 387 万円
- 1) ネットワーク運営費 5 万円
・ サーバ更新料、ドメイン更新費
- 2) 事務局通信費 25 万円
- 3) 事務局業務委託費 300 万円
- 4) 事務用品費 15 万円
- 5) 備品購入費 10 万円
- 6) 管理委託費 6 万円
・ システム運用費用として 6 万円を計上します。
- 7) 雑費 25 万円
・ 振込、自動引き落とし、各種発行手数料などの費用として 25 万円を計上します。
- 8) 予備費 1 万円
- 9) 租税公課 2 千円

以上

一般社団法人CIEC2023年度予算案

(単位：円)

科 目	金 額	
(経常損益の部)		
I 経常収益		
1 会費収益		
1) 個人会員会費収入	4,000,000	
2) 団体会員会費収入	6,600,000	
	10,600,000	
2 財務収益		
1) 受取利息	2,000	
	2,000	10,602,000
II 経常費用		
1 事業費用		
1) 会議費用	870,000	
2) 会誌発行費用	3,400,000	
3) 広報費用	100,000	
4) 研究会費用	500,000	
5) 調査費用	0	
6) 事業活動費用	250,000	
7) 支部活動援助金	610,000	
8) 部会活動援助金	770,000	
9) 学会表彰事業費用	30,000	
10) 教育出版費用	0	
11) 周年事業費用	0	
12) PCC支援金	0	
13) 中期活動計画調査費用	200,000	
	6,730,000	
2 管理費用		
1) ネットワーク運営費	50,000	
2) 事務局通信費	250,000	
3) 事務局業務委託費	3,000,000	
4) 事務用品費	150,000	
5) 備品購入費	100,000	
6) 管理委託費	60,000	
7) 雑費	250,000	
8) 予備費	10,000	
9) 租税公課	2,000	
	3,872,000	10,602,000
3 財務費用	0	
1) 支払利息	0	
経常損失金		0

資料1：専門委員会、部会、支部2022年度活動報告と2023年度活動方針

※敬称略にて作成しています。

会誌編集委員会

1. 2022年度活動報告

- (1) 会誌「コンピュータ&エデュケーション」53号（2022.12.1）を発行しました。
 - ・ INTERVIEW 「滋賀大学でのデータサイエンス教育」
 笹田薫さん（滋賀大学データサイエンス・AIイノベーション研究推進センター センター長）に聞く／寺尾敦編集長
 - ・ 特集「デジタル化・DX化による外国語教育の新たな可能性」：6本／特集担当編集委員：鳴海智之委員
 - ・ 2020PCカンファレンス報告「学びのアタリマエを揺さぶる」
 - ・ 研究論文1本／実践論文4本／実践報告1本／本の紹介※特集を除く一般投稿は13本で採択されたものは6本、採択率は46%でした。
- (2) 会誌「コンピュータ&エデュケーション」54号（2023.6.1）を発行しました。
 - ・ 鼎談：「変わる大学の学習環境」
 若林靖永（佛教大学）・飯吉透（京都大学）・中森一朗（全国大学生協連専務理事）
 - ・ 特集「コンピュータが開く新しい学習評価・テストの可能性」：4本／特集担当編集委員：樋口三郎委員
 - ・ 研究論文1本／実践論文4本／※特集を除く一般投稿は17本で採択されたものは5本、採択率は29%でした。5本の論文が審査継続となっています。
- (3) 会誌編集委員会を、以下の日程（会場）で開催しました。
 - 第86回：2023年8月11日（WEB会議システムによる遠隔会議）
 - 第87回：2023年11月13日（WEB会議システムによる遠隔会議）
 - 第88回：2023年4月8日（WEB会議システムによる遠隔会議）
- (4) 2022PCカンファレンスで会誌編集委員会企画セミナー「CIEC会誌『コンピュータ&エデュケーション』に採択されるために—APA Publication Manualに学ぶ論文の書き方—」パネリスト：寺尾敦（青山学院大学）を開催しました。
- (5) 会誌49号からオンライン投稿・査読システム Editorial Managerを導入し、継続して運用しています。

2. 2023年活動方針

- (1) 会誌『コンピュータ&エデュケーション』55号および56号を刊行します。昨年度に引き続き『コンピュータ&エデュケーション』の内容をさらに充実させることを目指します。「本の紹介」については、従来と同様に理事会メンバーの積極的な投稿をお願いします。
- (2) 本格運用を開始したオンライン投稿・査読システム Editorial Manager（会誌第49号より導入）について、適宜検証を行い、必要に応じてシステムの改善を図ります。
- (3) 会誌編集委員会を年3回程度開催する予定です。
- (4) より質の高い論文等の投稿が増えるよう2023PCカンファレンスで会誌編集委員会企画セミナーを開催します。「CIEC会誌『コンピュータ&エデュケーション』に採択されるために—論文賞受賞論文に学ぶ論文の書き方—」パネリスト：論文賞受賞者に依頼予定
- (5) 巻頭インタビューについては、これまでと同様にCIEC団体会員をはじめ、団体会員外企業等にも積極的にインタビューを依頼し、CIECへの理解を深めることを目指します。また、会誌の特集に関連するテーマ・トピックも考慮しながら、各種ソフトウェア・システム等を有効に活用している実績のある個人についても、インタビューの対象としていきます。

(6) 学会賞選考委員会に会誌編集委員会として協力します。

広報・ウェブ委員会

1. 2022年度活動報告

広報・ウェブ委員会は、CIECの広報全般、特にウェブサイトの運営等に取り組み、会員への情報提供、社会への発信等を強めることを目的に活動しています。2022年度は、例年と同じくCIEC公式サイトおよびSNSツールの運用に加え、PCC公式サイトのリニューアル事業を無事に完了させました。続く2023PCCに向けた情報公開も、前年度のシステムをベースに順次進めています。

また、中期活動計画のワーキングチームとの連携については、特に「学会及び大会名称の変更」に関する会長対談動画の収録・編集・掲載を行いました。あわせて「会長ページ」も新設し、過去のSpecial記事とともに集約しました。

2. 2023年度活動方針

2023年度は上述の内容に加え、以下のような方針を念頭に活動を行います。

1. 2021以前のPCCサイトのアーカイブの整備
2. 中期活動計画の各ワーキングチームとの広報面での連携・技術支援
3. 学会の認知度向上および会員獲得につながる企画・コンテンツ作り

項目1は、2021年度以前のPCC公式サイトのデータをCIECのサーバーに移植する作業と、過去の分科会発表論文をより検索しやすくする作業を指します。特に前者の作業は、現行サーバーの閉鎖が予定されているため、2023年秋を目処に完了させる予定です。

項目2については、中期活動計画の他のワーキングチームとも協議しながら進めていきます。

項目3については、委員会内でコンテンツや企画の具体的な内容を議論しているところです。CIECは多様な会員がいることが1つの特徴ですが、会員間のコミュニケーションの機会が限られていることが、会員であることのメリットを小さくしている一因ではないかと考えています。既存イベントの拡張の提案なども含め、他の委員会との積極的な連携を目指します。

国際活動委員会

1. 2022年度活動報告

2023年6月25日（日）生協職員部会・小中高部会共催で、「USAにおける教科書&図書館のデジタルシフトの状況・トレンド」というテーマの研究会を対面で開催する。USAにおける教科書&図書館のデジタルシフトの状況について、UCOM社 Faustino Hernandez 氏に以下の内容の講演をしていただき質疑応答を行った。

- ・ USAにおけるデジタルテキストへのシフトの現状
- ・ UCDavisでの完全デジタルテキスト教材プログラムについて
- ・ 大学図書館、大学Bookstoreのデジタル化の現状
- ・ USAでデジタル教材のプログラムを取り入れている研究者からの収録済みプレゼン
- ・ (3校の大学で現地調査をしていただき、インタビュー等の動画を日本語テロップをつけてご提供いただく)
- ・ デジタルコンテンツを提供している企業の開発状況（アジアも担当）

2. 2023活動方針

CIEC会員が海外の教育関連情報を収集することができるように支援し、その環境構築に向けた立案企画を行う。

具体的には、下記のような活動を模索し、研究会やPCC等につなげる。

- ・ 米国のICT環境と教育：2023年6月25日に行われる研究会の講師である米国UCOM社Faustino Hernandez氏との関係を継続し、発展した研究会さらには、相互訪問等のチャンスを探る。
- ・ 英国のICT環境と教育：副委員長である李先生の英国における調査報告に関する研究会を開催する。
- ・ 韓国高麗大学の李研究室：可能な状況となれば、以前行ったような日韓相互訪問などで関係を継続していく。両国のICT教育について共同研究を展開する。
- ・ 諸外国の教育状況調査：上記以外の諸外国でも、コロナの感染拡大によってオンライン授業を余儀なくされ、教育DXが推進された。ポストコロナにおける教育の変容・諸外国における教育DXや情報教育の動向の情報収集ならびに調査研究などを計画する。

研究委員会

1. 2022年度活動報告

研究委員会は、会員相互の研鑽と交流の機会創出を目的とした研究会の企画・運営を行っています。また、本委員会が主催する春季カンファレンス（春季研究会）を定期的で開催しており、会員が研究発表・議論を行う機会を広く提供しています。2022年度は当初の活動方針に従って、以下の活動をしました。

- (1) 今年度企画されたCIEC研究会（第129回）について、企画・運営計画や実施状況などについて確認し、WebやMLにて告知をおこないました。
- (2) 「CIEC春季カンファレンス2023」を開催し、「CIEC春季カンファレンス論文集Vol.14」（電子版）を刊行しました。概要は下記のとおりです。

「CIEC春季カンファレンス2023」は、コロナの状況を鑑みながら開催方法を慎重に検討し、対面開催を前提に発表論文の募集をすることにしました。査読付論文には12編の投稿があり、査読の結果、速報論文9編、資料1編が採択されました。査読なし論文に2編の投稿があり、審査の結果2編が採択となりました。U-18発表論文は4編の投稿があり、審査の結果4編が採択となりました。査読付論文を対象とした論文賞1件、U-18発表論文を対象としたU-18最優秀賞1件、U-18優秀賞1件、U-18奨励賞2件が、各賞の表彰となりました。

主な変更点として、(i) 査読なし論文のカテゴリーを準備した。(ii) 一般が対面、U-18がオンライン発表ということで、対面とオンラインとハイブリット開催とした。

当日は、発表者・参加者の皆さまのご協力のもと、活発な質疑応答や議論が交わされ、大きなトラブルも無くスムーズにプログラムを進行できました。CIEC春季カンファレンス2023に関わってくださったすべての皆さまに感謝申し上げます。

開催概要

日程：2023年3月11日（土）

会場：東京理科大学 森戸記念館、Zoom（U-18のみ）

発表件数：

- ・ 一般論文（査読付）発表：9件（速報論文8件、資料1件）
- ・ 一般論文（査読なし）発表：2件
- ・ U-18論文発表（概要審査）：4件

参加者：対面参加36名 ZOOM14名 合計50名

表彰：

◎論文賞：

日向寺 玲花・菅谷 克行（茨城大学）

「アバターを使用したオンライン議論に関する一考察」

◎U-18最優秀賞：

岩村陸・岡田浩毅（早稲田大学高等学院）

「二つの文章の類似度スコア計算プログラムの比較検討—Watsonの内部処理の再現—」

◎U-18 優秀賞：

・宮尾旺佑・松井桃太・堀蒼天・吉原正太郎（東京都立科学技術高等学校）

「HMDの利用経験の有無がVR酔いに与える影響」

◎U-18 奨励賞：

・栗山真幸・猪村美結・堺あゆみ・森田陽菜実（長崎県立長崎南高等学校）

「高校生は1人1台端末を学習にどう活用し、どのような効果を感じているのか」

・藤原豪弓（東洋大学附属牛久高等学校）

「片頭痛警告システム“Migraine Warning System”の開発」

2. 2023年度活動方針

(1) 春季カンファレンスについて、以下の点を検討します。

- ・開催日程、会場（対面・ポスター/オンライン）、投稿期日などについて、慎重に検討します。
- ・参加者増に向けて、参加方法を慎重に検討します。
- ・参加費、企業協賛等の収入見込みや経費の見直しにより、引き続き、収支の改善を図ります。
- ・講演会、情報交換会など、新企画の可能性を慎重に検討します。

(2) 春季カンファレンスの他、CIECで開催される各種研究会や研究交流会の企画・運営案などを確認・承認し、広報・ウェブ委員会と連携しながらより一層の周知拡大を目指します。

(3) 春季カンファレンスの経験や運営ノウハウを、PCカンファレンスや各種研究会等における運営に還元し、CIEC全体のさらなる発展に寄与することを目指します。

小中高部会

1. 2022年度活動報告

2022PCカンファレンス（オンライン開催）の運営協力

・セミナー3 8月13日（土）14:15～16:10

テーマ：望ましい情報Iのあり方～大学入試共通テスト「情報」を見据えて～

パネリスト：武沢護（早稲田大学高等学院長）・中野由章（工学院中学校高等学校長）

司会：平田義隆（京都女子中学校高等学校）

研究会（2回（うち1回は共催））

第129回研究会

テーマ：紙かデジタルか～読み書きでの適切な道具の選択～

開催日：2022年11月23日（水）14:00～16:00（Zoomによるオンライン開催）

講師：柴田博仁氏（群馬大学情報学部）

第130回研究会（国際活動委員会主催・小中高部会共催）

テーマ：USAにおける教科書&図書館のデジタルシフトの状況・トレンド

開催日：2023年6月25日（日）10:00～12:00

場所：青山学院大学

講演：Faustino Hernandez氏（UCOM社）

CIECサタデーカフェの開催及び運営

第15回：2022年9月10日（土）20:00～21:00

テーマ：Googleの宿題機能は学力を低下させるか～真の学力とは何か～

話題提供者：吉田賢史氏（早稲田大学高等学院）

第16回：2022年10月15日（土）20:00 - 21:00

テーマ：文部科学省の教育データ標準について

話題提供者：横濱友一氏（学校法人聖徳学園）

第17回：2022年11月19日（土）20:00 - 21:00

テーマ：情報の授業で教わりたかったこと～生徒だった側の視点から～

話題提供者：hikalium氏（Google 合同会社）

第18回：2022年12月17日（土）20:00 - 21:00

テーマ：都立中高一貫校における校務支援システムの導入

話題提供者：鶴沼拓也氏（東京都立両国高等学校）

第19回：2023年1月21日（土）20:00 - 21:00

テーマ：接点の発明～異なる人とのかかわりをつくるデザイン～

話題提供者：高橋鴻介氏（発明家）

第20回：2023年2月25日（土）20:00 - 21:00

テーマ：自然の中で子どもたちの生き抜く力を鍛えよう！活動を通してともに学ぶ

～一般社団法人NELCrewを立ち上げて～

第21回：2023年4月15日（土）20:00 - 21:00

テーマ：「モノをつくる力で、コトを起こす」神山まるごと高専、開校！

話題提供者：大山力也氏（神山まるごと高専）

第22回：2023年5月20日（土）20:00～21:00

テーマ：「ITチューター」として取り組んできたこと

話題提供者：石井喜大氏（国際基督教大学4年）

第23回：2023年6月10日（土）20:00 - 21:00

テーマ：「自分の頭で考えるために。答えのある問いも答えのない問いも。」

話題提供者：鈴木尚子氏（京都女子中学校高等学校）

その他

- ・CIEC 春季カンファレンス 2023 小中高生参加協力

2. 2023年度活動方針

- ・大学入試共通テストへの「情報Ⅰ」の導入について～「情報Ⅰ」のあり方について考える～
高等学校では2022年度から共通教科「情報」の科目が「情報Ⅰ」と「情報Ⅱ」に再編され、2025年度入試より大学入試共通テストにおいて「情報Ⅰ」が導入されることがすでに決定されている。これにより、高等学校の現場では教育方法が大きく変化していかざるを得ない状況になっているが、現在のところ入試に向けた動きが特に認められない。そこで大学入試を見据えた「情報Ⅰ」今後のあり方について考察し、理解を深めていきたい。
- ・小中高におけるデータサイエンス教育について
現在、小中高校では社会の変化を受けて、統計教育やデータサイエンス教育領域が注目を浴び、新指導要領でも大きく取り扱われています。しかし、実際にデータの収集から行い、分析、対策、評価という一連のプロセスにおいて、それらを指導することに戸惑いを持つ現場の教員の声も多く出ています。また大学入試共通テスト等の試験範囲にもなっており、活用できる力をつける教育より、試験を突破するための知識を身につけるものだけになってしまう懸念も囁かれているところです。そこで、様々な現状を踏まえ、現場での統計教育及びデータサイエンス教育の今後のあり方について、議論していきたいと考えています。

・ AI(人工知能)の教育的利用について

ChatGPT の流行に代表されるように、AI(人工知能)はすでに我々の生活空間に共存していると言っても過言ではない状態になっています。これらの登場に伴って、教育の現場では、この技術革新が学習者の「学び」を深められることが期待されている一方で、これをどのように利用するかが社会的な課題にもなっているところです。この研究会では AI と教育の関わりについてのメリットおよびデメリットを整理し、今後の様々な課題について議論を進めていきたいと考えています。

具体的な活動

- (1) 研究会の実施（基本的には対面で行うことを視野に入りたいがオンラインの可能性もあり。）
 - ・ 大学入試共通テストへの「情報 I」の導入について
 - ・ 小中高におけるデータサイエンス教育について
 - ・ AI(人工知能)の教育的利用について
- (2) 2023PC カンファレンス（つくば国際会議場）への協力
- (3) CIEC サタデーカフェの運営
- (4) 北海道地区において、PC カンファレンス北海道などに参加・協力・学習会の実施
- (5) 世話人会の実施（年3回、関東・関西等で開催予定）
- (6) 国際活動委員会との連携
- (7) 研究委員会との連携
- (8) プロジェクトへの協力

外国語教育研究部会

休止中

生協職員部会

1. 2022年度活動報告

(1) 研究会／企画

8月 PC カンファレンス セミナー2

テーマ：「コロナ前・コロナ下・コロナ後で大学生の学びへの考え方の変化はあったのか？」

パネリスト

毛利 貴（早稲田大学人間科学部4年）

卯田 寿里（千葉大学理学部地球科学科4年）

中野 駿（名古屋大学理学部数理学科4年）

ファシリテーター

小野田 哲弥（産業能率大学 情報マネジメント学部 教授）

司会 有馬 光星（東京医科歯科大学生活協同組合職員・CIEC 生協職員部会）

コロナ禍前に入学し、コロナウィルス蔓延を経てコロナ禍を大学で過ごしてきた4年生学生を3名迎え、それぞれの大学の現状から自分の学びへの取り組み方・考え方の変化について発表してもらい、それを基に大学生の学びの変化や今後の大学での学びへの期待、これからの大学生の希望について議論をしていくことを目的として実施した。

コロナ禍は大学生にとってプラスだったのか、マイナスだったのかという疑問など、コロナ禍における学びに対して様々な角度から討論が広がり、いい意味で着地点の無い結果にたどり着けたセミナーであった

(2) 世話人会（関東世話人会計8回実施）

2022/6/15, 7/14 2022PCカンファレンス打ち合わせ

2022/11/22 勉強会企画実施について検討打ち合わせ、国際活動委員会との

2023/2/2, 3/9, 5/16 2023PCカンファレンス打ち合わせ

2. 2023年度活動方針

- (1) ポストコロナの中でのキャンパス内外の学びに関する変化を捉え、今後どのような学修支援を目指していくべきか研究する。
- (2) 学生同士の学び合いや経験を継承する場づくりの研究、現状と変化について継続的調査を行う。
- (3) 上記(1)(2)の活動を通じて生協職員のCIEC会員の増加につとめる。

数理・データサイエンス・AI教育研究部会

1. 2022年度活動報告

(1) 世話人会

2023年2月5日（オンライン）：第一回会合（本部会の趣旨確認、今後の方針、他）

(2) サイト（<https://www.ciec.or.jp/committee/mdash/>）の立ち上げ

2023年4月17日に公開開始

2. 2023年度活動方針

- ・大学における数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度の実施状況について

文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」に関して、多くの大学で全学教育として数理・データサイエンス・AI教育が導入されつつある。その導入方法や内容についても多種多様であり、これらの情報共有は有意義である。本研究部会では実施状況を検証しつつ、各大学での導入事例等の情報共有を行う。

- ・新課程における数理・データサイエンス・AI教育に展開

初等中等教育における学習指導要領の改訂により、新しい内容での入学試験が2025年度入試から導入される。これらの内容に対する共通テストにおける数学や情報での問題作成の方向性や試作問題等を踏まえた各学校での対応状況や大学における新しい入試形態等の対応について情報共有を行う。また小学校・中学校での全国学力・学習状況調査におけるデータの分析に関係する出題問題等に触れ、小中高との体系的な学びについても議論する。

具体的な活動

- (1) 2023 PCカンファレンス（つくば国際会議場）で小中高部会と共催セミナーの実施
- (2) 小中高部会の「CIEC サタデーカフェ」への参加（7月）
- (3) 研究部会の実施（冬季開催）
- (4) 世話人会の実施（年2回）
- (5) 関連学会・研究会との連携した情報共有
- (6) ウェブサイトでの情報発信

北海道支部

1. 2022年度活動報告

- (1) 「PCカンファレンス北海道2022」の開催

【開催概要】

テーマ：データサイエンス教育の今を考える

資料1：2022年度活動報告及び2023年度活動方針（専門委員会・部会・支部）

開催形態：オンライン <https://ciec.hokkaido.jp>

開催期日：2022年11月26日(土) 10:00開始

- ・特別講演 10:15～11:10
- ・パネルディスカッション 11:10～12:15
- ・分科会発表 13:00～17:00

主催：PCカンファレンス北海道2022実行委員会

共催：CIEC コンピュータ利用教育学会・全国大学生協連合会北海道ブロック

参加者数：60名

参加料：無料

論文集：1,000円

協賛：日本データパシフィック、noa出版、株式会社 富士通パーソナルズ、富士電機 IT ソリューション株式会社

【プログラム】

10:00～10:15 開会式 (Zoom ウェビナー)

10:15～11:10 特別講演 (Zoom ウェビナー)

11:10～12:15 パネルディスカッション (Zoom ウェビナー)

13:00～17:00 分科会発表 (Zoom ミーティング)

例年PCカンファレンス北海道（以下、PCCH）は、札幌市内及びその近郊と道内各地の大学を交互に会場として開催してきた。2022年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を考慮し、2021年度同様、オンラインで開催した。開催に至るまで、会議はハイブリッドで行い、Slackも含めて準備を進めた。

テーマに基づいた特別講演の後、パネルディスカッションを行った。登壇者を含め、60名弱の参加があった。分科会は、昨年度に倣い、リアルタイムでの発表とした。本年度もPCCH2022特設Moodleサイト(<https://ciec.hokkaido.jp>)で、参加登録者のみ発表論文を閲覧可能とする環境で行なった。

【開催報告】

「データサイエンス教育の今を考える」をテーマとした。文部科学省では「数理・データサイエンス・AI」に関する基礎的な能力及び実践的な能力の向上を図る機会の拡大を目的として、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（MDASH）」を設定した。これに伴い、高等教育機関では、文理を問わず「数理・データサイエンス・AI」に関して体系的に学べる教育課程の整備が進められ、すでに多くの大学が認定されている。そこで、「数理・データサイエンス・AI」にかかる能力の育成を目指す教育について、カンファレンス参加者とともに、改めて情報を共有し、学ぶ機会となった。

特別講演は、東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授 松田稔樹氏に「より良いAI・数理・データサイエンス教育を設計する観点」をタイトルに講演していただいた。

パネルディスカッションでは、「データサイエンス教育の今後に迫る」をテーマとして、松田稔樹氏（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院）、笹岡久行氏（旭川工業高等専門学校）、高瀬敏樹氏（市立札幌旭丘高等学校、PCCH2022実行委員）、原田ゆかり氏（株式会社ワークアカデミー営業統括部）に登壇いただき、曾我聡起氏（千歳科学技術大学教授、PCCH2022実行委員）にコーディネートをお願いした。大学、高専、高校、出版社というそれぞれの立場からデータサイエンス教育にかかる話題提供をいただき、データサイエンス教育の現状・課題・今後について意見交流を行った。質疑等活発に行われた。

分科会発表件数は、11件（一般6件 学生5件）であった。また、学生プレゼンテーションスキル賞は、公立千歳科学技術大学理工学部情報システム工学科の橋本春樹さんの「世界遺産キウス周堤墓群におけるデジタルコンテンツを用いたガイドシステムの開発とユーザ分析」に決定した。

刊行したPCC2022論文集には、日頃の情報機器を活用した教育活動、教育の情報化の実情や課題など、幅広い内容の実践論文、萌芽論文、研究速報などが寄せられた。本活動においては、コンピュータを利用した教育活動を横断的な視点でとらえて、継続的に情報交換や議論を行える場となることが期待された。

(2)北海道における大学1年生を対象にした情報教育に関する調査

COVID-19の影響により規模を縮小したものの、データを継続的に収集しフィードバックを行っており、情報教育担当者の共通基盤として有効活動されている。

2. 2023年度活動方針

(1)PCカンファレンス北海道2023の開催

開催形態、テーマ、開催期日等未定であるが、10月あるいは11月に開催する予定。

(2)支部研究会の開催

時期、会場は未定であるが、ポストコロナにおける生成型AIと教育に関連するテーマでの研究会の開催を予定している。

(3)北海道における情報教育に関する調査の実施

引き続き北海道の大学1年生を対象にした調査を計画している。

九州支部

1. 2022年度活動報告

2022年度は、2022年11月12日（土）にホスト校を大分大学として九州PCCを開催し、基調講演（「これからの学びのSTEM/STEAM教育」大分大学 市原 靖士 教授）・特別講演（「高校1人1台端末の概況とSurfaceビジネスから読み取る新時代の大学生像」日本マイクロソフト株式会社 岡 涼平 氏）・ITフェア・分科会（発表7件）の全てをオンライン形式で実施した。オンラインの強みを生かし、実行委員会がホスト校の大分大学だけでなく、鹿児島大学・佐賀大学・熊本大学・事業連合によって組織されて協働で行われたことが特徴的である。ICTを活用した学生の学びと生活へのサポートをテーマとする情報生活サポート研究会では、教員、学生、生協職員の交流の多様化および対面での交流が困難な事態への対応力の向上を目指して立ち上げたSlackのワークスペースについて、その記録が保存・閲覧できる環境を整えた。

2. 2023年度活動方針

九州PCカンファレンスは、教員、学生、生協職員が共に学び、成長する場であり、ICT教育や情報化社会について学ぶ場としてだけでなく、語学教育、協同組合活動、平和、地域の学校教育など、さまざまな学びの場と捉えている。2023年度も九州PCCの開催地・開催校の調整が出来次第、アナウンスをする予定である。情報生活サポート研究会では、ICTを活用した学生の学びと生活へのサポートをテーマとする研究活動を継続する。特に本年度は対面での会員支援に力を注ぎ、教員、生協職員、学生の協同の中で、新しい時代における大学生協の役割を確かなものにする九州の大学生協とCIEC九州支部（知の協同組織）が一体となった活動を推進する。

資料 2：中期活動計画中間報告

中期活動計画(1) 組織運営の健全性確保

【担当】若林靖永、中村泰之

報告事項なし

中期活動計画(2) 学会及び大会名称の変更

【担当】長岡健、熊澤典良、松下慶太

若林会長からの学会名称の変更に関する問題提起(2022年11月)を受け、「CIEC 学会名称変更に関する会長対談」を企画し、広報委員会と協力しつつ、YouTube 上に公開した。

- ・第1回 若林靖永会長と白土由佳氏との対談(2023年1月公開)
- ・第2回 若林靖永会長と武沢護氏との対談(2023年4月公開)

中期活動計画(3) 団体連携

【担当】北村士朗、宿久洋、井内善臣、杉田豊

1. 他団体との連携

- ・ SCSC (スポーツキャリアサポートコンソーシアム) への学会としての入会が承認され、会員となり同コンソーシアムの年次総会に出席し、同コンソーシアム会長、事務局長、ディレクターと今後の連携の方向性について議論し、連携の具体化を進めることとなった。
- ・ 情報関係のコミュニティ(日本システムアドミニストレータ連絡会、日本 IT ストラテジスト協会等)との連携を模索中。

2. 大学生協との関係強化

- ・ 大学生協に提案する「CIEC 活用法」や、会員生協の諸活動の表彰を継続検討中(例：会員生協の諸活動の中から優秀 or/and ユニークなものを学会として表彰する)。
- ・ PCC2023 へ向け、会員生協、特に CIEC 団体会員生協の参加を促進する(教育 IT フェア、団体会員セッション、セミナー(特に職員部会主催)の PR 等)。

中期活動計画(4) K-12(小中高校生)の参加者化

【担当】中村泰之、高瀬敏樹、平田義隆

【活動指針】

1. 「K-12(小中高校生)本人が学会活動に参加する」ことを目指した仕組み・仕掛けを構築する。
2. 「K-12 と学会が連携すること」の意義に関するメッセージを積極的に発信する。

3. 「K-12の参加者化」の推進と合わせて、幼稚園、小学校、中学校、高校、専門学校、大学、社会人教育(人材育成)、オルタナティブ教育といったように「ライフステージのあらゆる段階における教育のフルラインナップ」を視野に入れた学会活動を目指していく。

【活動の経緯】

昨年までにまとまった活動計画として、以下の取り組みを予定していた。

- ・ 「K-12(小中高校生)本人が学会活動に参加する」ことを目指した仕組みとして、これまで小中高部会を中心に継続されてきた「サタデーカフェ」を今後も発展させていくために、ワーキングチームとしても、積極的に協力していく。
- ・ 「K-12(小中高校生)本人が学会活動に参加する」ことを効果的に実現するために、U-18向けのチュートリアル(論文の書き方、プレゼンの仕方など)の開催に向けて、現場の小中高の先生方の意見、要望を調査しながら、最も有効な内容、開催方法を検討していく。

これを踏まえた2年目の活動としては、「サタデーカフェ」が定期的に継続開催され、2022年9月以降8回実施した(2023年5月末現在)。発表者の内訳は、大学生・大学院生2名、高専教員1名、民間人2名、高等学校教員3名であり、学生、U-18担当教員が中心となり発信を行うことができた。これは、K-12参加者化に向けた基盤となっていると考えている。一方、U-18向けのチュートリアルについては、U-18担当教員向けの勉強会の開催を検討していたが、今年度は実現に至らなかった。

【今後の方針】

これまでの活動を土台として、3年目の活動として、以下の取り組みを予定している。

- ・ 引き続き、「K-12(小中高校生)本人が学会活動に参加する」ことを目指した仕組みとして、これまで小中高部会を中心に継続されてきた「サタデーカフェ」に、ワーキングチームとしても、積極的に協力していく。
- ・ 「K-12(小中高校生)本人が学会活動に参加する」ことを効果的に実現するために、U-18担当教員向けの勉強会を開催し、CIEC春季カンファレンス、PCカンファレンスへのK-12本人の参加を推進していく

中期活動計画(5) 重点テーマに関する研究促進

【担当】寺尾敦、菅谷克行、宿久洋

活動計画(5)WGでの検討に基づき、「数理・データサイエンス・AI教育研究部会(略称、MDASH研究部会)」を設立した。部会の専門領域は(1)数理・DS・AI(2)文理融合(3)リカレント(リスキリング)であり、設立目的・趣旨は「数理・データサイエンス・AI教育(MDASH)については、近年、その必要性が急速に高まっており、高等教育においては、すべての学生に対して身に付けるべき知識・技能と位置付けられている。多くの大学ではすべての在学学生を対象としてリテラシーレベルのMDASHプログラムを開講している。また、新学習指導要領では小学校1年次～高等学校1年次までデータ分析に関わる内容が必修として配置されている。このように、急速に進んでいるMDASHであるが、教員の知識・理解不足や未経験、指導方法の未確立など解決すべき課題も多く残っている。このような状況を踏まえ、この度、CIEC会員に対し、MDASHの課題や様々な取り組みを共有し、新たな教育方法や教材を検討することなどに取り組むことを目的とし、部会を開設することを計画した。」である。

本研究部会の部会長は竹内光悦(実践女子大学)であり、世話人会構成メンバーは、1.宿久洋(同志社大学)、2.中村泰之(名古屋大学)、3.輿治文子(東京理科大学)、4.武沢護(早稲田大学大学院教育研究科・高等学院)、5.吉田賢史(早稲田大学高等学院)、6.菅谷克行(茨城大学)、7.寺尾敦(青山学院大学)、8.竹内光悦(実践女子大学)、

9. 大橋真也（順天堂大学）、10. 平田義隆（京都女子高等学校）、11. 樋口三郎（龍谷大学）、12. 篠田有史（甲南大学）、13. 末永勝征（鹿児島純心女子短期大学）の各氏である。

中期活動計画(6) 情報発信のチャネル拡大

【担当】角南北斗、興治文子、北村士朗、高瀬敏樹、橘孝博

昨年度の報告で「イベントを通じて多様な会員の声を聞くことが重要」という意見があったと述べたが、最大のイベントである 2022PC カンファレンスは直前でオンライン開催へ変更となり、会員の声を十分に聞く機会が得られなかった。また、2023 年は現地開催の予定であるものの、blank を考慮して「まずは現地開催をきちんと行うことを優先する」という背景もあり、そこでの新しい企画などの実行には至っていない。次のイベントに向けて企画を具体化していくことが課題となっている。

ワーキンググループでは、メンバーでの議論に加えて、広報・ウェブ委員会での議論内容も共有し検討した。特に、CIEC オリジナルの YouTube 動画企画や、会員間のコミュニケーションを増やせるようなイベント設計の必要性は、両方で共通して議題に上がっている。今後これらの検討を進め、企画に適したコンテンツを持っている会員に働きかけ、実現していきたい。

中期活動計画(7) ダイバーシティ&インクルージョンの推進

【担当】若林靖永、中村泰之、北村士朗、長岡健、白土由佳、森夏節、鈴木大助、興治文子

今期の理事会では、女性理事および新規理事の増加が図られた。特に女性理事については個人理事 19 名中 6 名となり、約 3 割となった。

今後の活動方針としては、多様な背景を持つ方が参加しやすい学会づくりを促進していきたい。本会の会員の多くが集う PC カンファレンスが久しぶりに対面開催されることを契機に、交流しやすい場の提供を検討する。

資料 3 : CIEC 活動スケジュール

2022年7月

- 1日(金) 2023年度一般社団法人CIEC定時社員総会 開催公示
 16日(土) 小中高部会「第14回サタデーカフェ」(オンライン)
 17日(日) 2021年度監事会(大学生協会館)
 22日(金) 選挙管理委員会(大学生協会館・オンライン)

2022年8月

- 10日(水) 2021年度第4回理事会(オンライン)
 2022PCカンファレンス第5回実行委員会(オンライン)
 11日(木) 2022PCカンファレンス(オンライン)
 テーマ「学びのアタリマエ揺さぶる」
 会誌編集委員会(オンライン)
 12日(金) 2022PCカンファレンス(オンライン)
 2022年度一般社団法人CIEC定時社員総会(大学生協会館)
 13日(土) 2022PCカンファレンス(オンライン)

2022年9月

- 2日(金) 定例三役会議(オンライン)
 10日(土) 小中高部会「第15回サタデーカフェ」(オンライン)

2022年10月

- 3日(日) 研究委員会(オンライン)
 9日(土) 会誌編集委員会(オンライン)
 15日(土) 小中高部会「第16回サタデーカフェ」(オンライン)
 19日(日) 定例三役会議(オンライン)
 30日(日) 定例三役会議(杉並会館)
 2022年度第1回理事会(杉並会館・オンライン)

2022年11月

- 8日(火) 定例三役会議(オンライン)
 12日(土) 九州PCカンファレンス
 13日(日) 会誌編集委員会(オンライン)
 19日(土) 小中高部会「第17回サタデーカフェ」(オンライン)
 23日(日) CIEC 129回研究会(小中高部会主催)(オンライン)
 テーマ「紙かデジタルか ～読み書きでの適切な道具の選択～」
 26日(土) 2023PCカンファレンス第1回実行委員会

PC カンファレンス北海道

2022年12月

- 1日(木) 『コンピュータ&エデュケーション Vol.53』発行
10日(土) 研究委員会(杉並会館)
21日(水) 定例三役会議(オンライン)
17日(土) 小中高部会「第18回サタデーカフェ」(オンライン)

2023年1月

- 7日(土) 2023PCカンファレンス第2回実行委員会(オンライン)
21日(土) 小中高部会「第19回サタデーカフェ」(オンライン)
24日(火) 定例三役会議(オンライン)

2023年2月

- 6日(月) 臨時三役会議(オンライン)
13日(月) 2023PCカンファレンス第3回実行委員会(オンライン)
25日(土) 小中高部会「第20回サタデーカフェ」(オンライン)

2023年3月

- 1日(水) 定例三役会議(オンライン)
7日(火) 2023PCカンファレンス第4回実行委員会(オンライン)
11日(土) 2023春季カンファレンス(東京理科大学・神楽坂キャンパス)
12日(日) 定例三役会議(杉並会館)
2022年度第3回理事会(杉並会館・オンライン)

2023年4月

- 1日(土) 2023PCカンファレンスサイト公開
2023PCカンファレンス論文投稿受付開始(4月30日締切)
2023PCカンファレンスイブニングセッション受付開始(4月30日締切)
CIEC学会賞公募開始(4月30日締切)
4日(火) 定例三役会議(オンライン)
2023PCカンファレンス教育・ITフェア出展申込開始(5月15日締切)
8日(土) 会誌編集委員会
15日(土) 小中高部会「第21回サタデーカフェ」(オンライン)
18日(火) 2023PCカンファレンス団体会員発表セッション申込開始(5月15日締切)
22日(土) 2023PCカンファレンス第5回実行委員会(オンライン)

2023年5月

- 13日（土） 定例三役会議（オンライン）
2023PCカンファレンス第6回実行委員会（オンライン）
- 14日（日） 2023PCカンファレンス時間割編成会議（大学生協会館）
- 20日（土） 小中高部会「第22回サタデーカフェ」（オンライン）
- 30日（火） 2023PCカンファレンスポスター発行

2023年6月

- 1日（木） 『コンピュータ&エデュケーションVol.54』発行
2023PCカンファレンス参加申し込み開始（8月3日締切）
2023PCカンファレンス論文投稿開始（6月30日締切）
- 10日（土） 小中高部会「第23回サタデーカフェ」（オンライン）
- 18日（日） 定例三役会議（東京理科大学）
2022年度第4回理事会（東京理科大学・オンライン）
- 25日（日） CIEC 130回研究会（国際活動委員会主催・生協職員部会/小中高部会共催）
（青山学院大学）
テーマ「USAにおける教科書&図書館のデジタルシフトの状況・トレンド」

資料4：学会名称変更メンバーズコメント（2023年5月15日～6月11日実施）

	学会名称の選択理由	学会名称変更をめぐる意見や質問	その他CIECについて意見や質問
【1.「学習環境イノベーション学会」】			
1	理由記載なし		
2	コンピュータを取り巻く環境が大きく変化しており、その変化がもたらす教育への影響を考えると、学会名は変更した方が良いと考える。その際、コンピュータ利用が学習環境への働きかけだと考えると、これまでの学会としての取り組みを踏まえた名称変更であると考えられるため		
3	会長の提案趣旨に賛同します。		英語名の略称CIECは変えないこと。Community for Innovation of learning Environments through Cooperation
4	教育と学習は同じ概念では無いので両方入れた方が良いのかな、という気もするがちょっと長い。ただ「学修」という概念はどうするか？	英語名は変更するのだろうか。変えた方が良いと思うのだが。	
5	理由記載なし		
【2.「教育学習環境イノベーション学会」】			
1	理由記載なし		
2	提案されている「学習環境イノベーション学会」より、「教育」がつく方が、これまでのCIECを引き継いでいる感じがするから	設立当初の「コンピュータ」という言葉の意味はほぼ失われており、またICTを活用する教育が当たり前になった現在、CIECの活動を体現する名称に変更した方が良いと思う。ただ、設立以来親しみ、浸透してきたCIECという名称については「呼称」「愛称」以上の位置づけで残して欲しい この名称変更を機に、大学生協内でも「情報機器担当者の関わる学会」という位置づけから、「すべての大学生協職員が積極的に関わる学会」という位置づけに変わり、これまで以上に積極的な参加が増えることに期待します	この際、「PCカンファレンス」の名称も見直した方が良いのではないかとも思う。そうになると個人的にはとても寂しいが…
3	「コンピュータ利用～」ではコンピュータの利用が必須となる。しかし、コンピュータの利用にこだわらず教育学習環境について広く取り扱う学会の方が今後発展性がある気がします。	学期名の変更に伴い、学会誌の採録基準も見直すべきです。必ずしもコンピュータの利用にこだわらなくていいのではないのでしょうか。	コンピュータの利用に重きを置く、もしくは制限することは、学会としての幅を狭めることになると思います。
4	理由記載なし		
【3.「コンピュータ利用教育学会（現行）」】			
1	学習環境や教育環境を念頭にすることは他学会でも可能であり、コンピュータを利用することこそが差別化に繋がるから。	今回の学会名称の変更には妥当性を感じません。他の学会とどう違うのかを理解して進めないといけないのに、差のない形にしてどうするのでしょうか。	教育環境や学習環境は教育系全般に当てはまりません。コンピュータ利用と銘打つからこそ、この学会でやりたいことが伝わると考えています。もう少しコンピュータを利用するという趣旨を大事にできないものなのでしょうか。
2	前会長が明確に説明していた。全く変える必要はない。変更したら退会する。	変更したら退会する。	これまでのように実践を重視して、現場目線の学会継続して欲しい。会長かわってほしい。

資料4：学会名称変更メンバーズコメント（2023年5月15日～6月11日実施）

	学会名称の選択理由	学会名称変更をめぐる意見や質問	その他CIECについて意見や質問
	【3.「コンピュータ利用教育学会（現行）」】		
3	今後「イノベーション」という言葉が陳腐化する恐れがあることから、奇をてらわずに普遍的な学会名のほうが良い。その意味では現行の「コンピュータ利用教育」のほうが普遍性が高い。またどのような学問領域なのかが分かりやすい。	なぜ急に学会名称変更という話が出てきたのかが分からない。イノベーション色を強く出した学会名への変更を議論するなら、コンピュータの教育的利用のパラダイムシフトが起きたコロナ禍の時期にすべきだったのではないか。それともAIの教育的利用の増大を見越した学会名称変更なのか。それであれば「伝統的なコンピュータを利用した教育」の研究発表がしづらくなるし、当学会の強みである大学生協との連帯感が薄れる気がする。	コロナ前のPCカンファレンスは、大学だけでなく生協・ベンダー・U-18と色々なバックグラウンドの方々とともに、「コンピュータを利用してよりよい教育をしていこう」というお祭りのような雰囲気があって大好きでした。 コロナ禍でオンライン開催になってから、例えば大学ICT推進協議会や日本教育工学会と競合しているような印象を受けます。他団体との差別化を図る意味でも、上記2団体とは異なるタイプの方が牽引して欲しいと思っています。
4	理由記載なし		
5	名称からどのような団体であるかが直感的にイメージしやすいから。	特になし	特になし
6	理由記載なし		
7	理由記載なし	教育にICTを活用するという、文字通りの活動内容に惹かれて入会したものであり、変更するのであれば、会の目的が入会の目的と離れたものになるため、退会することを考えている。	
8	現状のまま、ICT活用の学会？とわかりやすい。	次点：教育学習環境イノベーション学会 学会の方向性がICT等から完全にはなれ、方向性として教育学習全般とするのであれば、変更もやまなしと思う。	学会には、いつもありがたいと思って参加しております。
9	設立当時から、「コンピュータ利用教育学会」という名称は、会の目的に合わないと思っていたから。	名称と目的とが合ってなくても、コンピュータ利用教育学会の名称で慣れてきましたが、これを期に刷新するのに賛成です。	
10	1. 2の名称は内容的に外れに思うし、イノベーションなんて正直古臭い。現行名称は2010に変更したばかりで定着しつつあるのに、また変更するのですか？	「殿ご乱心！」としか思えない。理事の先生方も、いさめることはできないのか？	
11	現実、広義のコンピュータを利用した教育に関する学術会議として活動している団体であるので。	もし、「イノベーション」や類似の言葉が付与する学会であると、現在の貴会会員がコンピュータを使った授業や講義を口頭、ポスターや論文などの形で発表しているが、イノベーションやそれに近い要素もないと発表できなくなり、気軽に研究、執筆、投稿や発表ができなくなる危惧を強く感じてしまう。	少なくともコロナ患者が増えるリスクがある時に、学会名称の議論をすること自体、困難である。貴会会員全員が総会会場へ行きやすいような状況になってからでも、決して遅いとはいえない。
12	変更の必要性を感じていません。	このようなことに時間と労力を割くよりも、運営に関して、改善するようにしてください。	学会費をクレジットカード決済で納入できること、シニア永年会員を作ること、コンピュータエデュケーションのこれまでの論文などを、会員限定で、Web上に公開すること。これらは、他のこの規模の学会で行なわれていることです。是非実現してください。
13	コンピュータに関連した学会であることが分かるため		

資料4：学会名称変更メンバーズコメント（2023年5月15日～6月11日実施）

	学会名称の選択理由	学会名称変更をめぐる意見や質問	その他CIECについて意見や質問
	【3.「コンピュータ利用教育学会（現行）」】		
14	今後はChat CPTなどをはじめ、生成AIなど、いわゆるコンピュータという括りや概念がさらに前面に出てくると考えられます。学習環境に特化した学会ではないので、名称変更は不適切だと思いました。	会長理事の意志のみで問題提起されることには大変違和感があります。YouTubeなどでの配信も唐突です。理事会なり役員会の総意として提示が求められ、総会などを通じて議論が必要になると思います。	ご希望の名称の学会を新たに別途設立するとか、部会を設けるということを経ずに、学会本体の名称変更という手続きには無理があると思います。丁寧な議論を望みます。
15	現行の表現は絶妙で、「コンピュータを利用した教育」と「コンピュータの利用について教育する」という2つの意味を持ち合わせると考えるからです。コンピュータ（およびICT）を利用するには、まず、それを子どもたちが利用できるよう、利用方法を知らせて（教えて）やらねばなりません。その入口部分から高等教育へ至るまでの活用部分まで、間口の広い教育系団体であることを端的に示せる表現として絶妙だと考えます。イノベーションだけが目的だと捉えられるより、現行の方がいいと考えます。	会長のお考えは動画等で拝見しましたが、そのことでもかえって間口を狭めるようなことになるのは良くないのではないのでしょうか。無理に名称を変更しなければならない理由が分かりません。	
16	従来、コンピュータ教育を中心として発展してきた学会であり、学習環境イノベーションや、教育学習環境イノベーションという名称はそぐわないと考えます。また、「イノベーション」という言葉に抵抗を感じます。一時の「イノベーション」という言葉の流行に流されており、現在の学会の活動にふさわしくないと考えます。	「学習環境イノベーション学会」「教育学習環境イノベーション学会」という名称になった場合には、学会を退会致します。	最近のCIECは名称変更の話題ばかりを取り上げ、学会本来の研究活動が疎かになっています。このような本質的ではない議論を長々と続けている状況を強く憂いとともに、呆れています。
17	理由記載なし		
18	理由記載なし		
19	会員活動に合致しているから。	学習環境イノベーション は否定するものではなく、まずは新研究会での活動から初めてはどうか。	
20	提案される学会名からは、Computerの概念がなくなり、当方の興味の対象がCIECの研究対象から外れるような印象があるため。	現在の「コンピュータ利用教育」という表現では、学習環境のさらなる発展をめざす目的には表現が古くいかにもスコープが狭いのでは、という点は同意するところがあり、さらにスコープを広げるための学会名称変更という提案であれば支持もやぶさかではない。ただ、現在提案された「学習環境イノベーション」という名称は、スコープを拡大するというよりは「テクノロジーの活用」が学会の興味の対象に含まれないというイメージを強く受けるため、そのイメージが正しい認識なのであればCIECは事実上なくなり別学会になるのだという解釈になるし、逆に誤解なのであればおそらく「テクノロジーの活用」もスコープに含めつつさらに活動範囲を広げるのだとわかる別の名称でないと、そちらに関心が深い会員が今後集まらなくなるのではないかという懸念が強い。 (単に「イノベーション」という用語のチョイスが、いかにも"ベンチャービジネスに興味あります"風に見えて違和感を覚えているだけなのかもしませんが)	
21	現行の学会名で問題無い。ビジネス系でない学会でイノベーションはそぐわない		
22	理由記載なし		
23	「環境」は範囲が広すぎる。「イノベーション」にこだわる必要はない。	現行の名称に固執はしないが、上記1、2には違和感があります。	変更するのは名称だけなのでしょうか。学会の目的を変更しようとする意図があるのでしょうか。

資料4：学会名称変更メンバーズコメント（2023年5月15日～6月11日実施）

	学会名称の選択理由	学会名称変更をめぐる意見や質問	その他CIECについて意見や質問
	【3.「コンピュータ利用教育学会（現行）」】		
24	何度も書くが変更検討することがおかしい	何度も書くが大反対	会長交代してほしい。そういう提案出来ないのだろうか？不適任。
25	理由記載なし		
26	学会としての認知度が高く、学会の研究内容に合致しているから	私は学会名称変更には反対です。学習環境やイノベーションといった内容も広く含んでのコンピュータ利用教育学会だと考えております。現在の名称での認知度が高いことから、変更による学会の価値の低下は免れないと考えます。また、中高教員としての観点から教育という名称を外すことは望ましいことではないと考えております。	
27	教育に「イノベーション」は馴染まないとする会員は、私の他にもおられるのではないかと思います。つまり会員に特定の立場を押し付けて欲しくない。その意味で、現行の名称を取り立てて変える必要性を感じない。	私はあえて申せば「コンピュータ利用教育学」を学ぶために入会したし、学会はそのような方々の集まりだと思う。明日から「学習環境イノベーション学」を学ぶ学会です。そのような会員に失礼なことは会長（理事会？）の独断でやって欲しくないし、新しく学会を立ち上げるのが筋だと思う。	学会名称は「CIEC」で良いのではないか。ケチの付いた「コンピュータ利用教育学会」は廃止。
28	気に入っています。	若干名前と実態が違って、それはそれでいいと思います。	
29	学会名称の変更に伴い予想される・されない不利益を避ける。	「学会名称変更」の提案理由・提案の主旨は文章で提示して下さい。	なし
30	新しく変更しようと考えておられる名称ではこれまでの学会での活動内容がイメージできないと考えます。それと学会名称を次々と変更していくという姿勢についても反対です。	まず、今回のPCCも久しぶりに対面で開催できるようになりました。この名称変更についても会員間でしっかり対面で議論して決定すべきだと思います。広く会員から意見を聞くためにも、メンバーズコメントも大切ですが、それ以外の方法でも聴取してもらえればと思っています。また、今回の名称変更で「教育」という言葉が消えようとしていることに大きな抵抗を覚えます。いろいろなフィールドの先生が集まっておられますので、解釈は人それぞれでしょうが、小中高の教員としては、現場はまだまだ「教育」ですし、そういった言葉が名称に含まれている方が勤務校でも学会活動を認めていただきやすいです。そういった意味からも、小中高部会ですですに反対の意見表明を理事会に提出しておりますし、その気持ちは変わっておりません。一般の会員の先生方ともフェアに議論するためにも意見表明をオープンにすべきかと考えます。	
31	変更の議論が深まったとは言えないので、現行がいいと思います。	変更について絶対反対というわけではありませんが、8月のPCCは久しぶりの対面となるので、顔を合わせたところで学会名称についてもよく議論してから決定していくのがよいと思います。	
32	学会名称に「イノベーション」と明記されてしまうと、先生方（特に小中高の教諭）が雑務にも追われる中で革新や新機軸のレベルまで求められてしまうことになり、本会で気軽に発表ができなくなる危惧があるので。	賛成のご意見は伺ったことがあるが、反対のご意見についても、その理由を伺いたい。 また、ご意見の動画が長すぎる。動画を動画をじっくり時間をかけてみる余裕はない。動画にするなら3分までの短い時間にしてください、さらにテキストに起こしてほしい。	

資料4：学会名称変更メンバーズコメント（2023年5月15日～6月11日実施）

	学会名称の選択理由	学会名称変更をめぐる意見や質問	その他CIECについて意見や質問
	【3.「コンピュータ利用教育学会（現行）」】		
33	イノベーションとは何か?その定義によるのかと思います。新しい技術革新は確かにありますが、それらを活用する場合は、リ・イノベーションではないかと考えます。Chat-GPTというのは確かに新しい技術革新ではありますが、それをどう再定義して日本独自で使うかはリ・イノベーションであろうと考えます。学会名称変更は賛成ですが、この1,2案ではないのではないかと思った&では何が良いのか?は出てこなかったの、3にしております。	イノベーションというよりは時代はレポリューションの時代だと思っております	いつもありがとうございます。なかなか参加できませんが勉強になっております。
34	「…学習環境イノベーション」といった学会が存在すること自体はべつに悪いとは思いますが、CIECがその名称に変更してしまうと、長年親しんできたCIECが、私の分野とは縁遠い学会になってしまう、と判断せざるを得ないからです。	(2)にも記したように、名称がご提案のように変更になると、自分の分野とは異なる分野の学会にCIECが変わってしまう（個別の活動内容はともかく大方針としては）と考えています。なので、せっかく長年所属して終身会員にもしていただきましたが、退会も考えなければならぬか、と考えています。	
	【その他「教育イノベーション学会」】		
1	1と2は長すぎる	コンピュータ利用にとられないで、広く教育におけるイノベーション(innovation in education)を視野に入れるという学会名称改革の視点はいいと思います。	
2	シンプルの方が良いから。ただし、現執行部による今年度の名称変更は反対する。	改名を議論する前に、CIECの問題点と課題を明確にすべきである。 CIECの会員数が減少している理由は、活動に魅力が無いからである。魅力のない原因は、組織の透明性がなく、役職者が固定し、毎年の事業計画の趣旨を顧みず、多くの会員の実質的な参加を阻害しているからである。筆者の場合、春季カンファレンスのメタ査読者、査読者による査読不正、これに対する執行部の隠蔽と筆者に対するハラスメントが、4年間、以前も含めれば11年も続いている。 CIECは、教育イノベーションを進めるだけの体質になっていない。教育環境全体を踏まえた独創的で新規性のある試みを論文で提案しても、表面的な既存のICTツールの使い方が少ないと査読意見を述べるなど、査読者が個人的曲解を述べて、教育イノベーションを否定している。多くの学会では30年ほど前から、40才前後の若手を集めた3年程度の任期の論文編集委員会を設けて、編集者で最適な査読者を複数選び、公正な査読を学べる場をつくっている。数十名の編集者が議論し、査読者からの査読意見に不備がある場合は編集者の中で補助査読者を選ぶ。2名の査読者が不採択とした論文も精査して採択にしたり、その逆で2名の査読者が採択にした論文も不採択にすることもある。このような努力を重ねて、編集委員経験者が、査読者に指名されて査読の質を高めるとともに、本人の論文作成や学生指導の能力を高めて、学術的な成果を生み出している。 まず、組織の透明性を高め、他学会で常識的に行われている筆者に対する査読のエビデンスの開示はもちろんのこと、不祥事まで含めてCIECの問題点と課題を示し、その上で到達点と目標を決めるべきである。	執行部がしないのならば、筆者が、エビデンスを踏まえたCIECの問題点と課題を広く開示します。 (3)(4)に対するエビデンスを記した具体的回答を、次の名称変更の提案を行う10日以上前までに、強く求めます。

資料4：学会名称変更メンバーズコメント（2023年5月15日～6月11日実施）

学会名称の選択理由	学会名称変更をめぐる意見や質問	その他CIECについて意見や質問
【その他「教育イノベーション学会」】		
3 教育という単語自体の持つ意味に教師が教え、生徒が教えてもらい育つという意味があるから変えたいと思っている方もいるかもしれませんが、現在の教育には、共に学び教え合うといった意味も含まれると私は思っているので、これまでのCIECが大切にしている教育とイノベーションの二つだけを残してみました。	今回、学会名称の変更について意見を求められています。本学会の名称は日本学術会議の登録ではCIEC（コンピュータ利用教育学会）となっていますが、この登録名自体が学習環境イノベーション学会や教育学習イノベーション学会となるのか、これまで通り、更にその前に英語表記の頭文字等も加えられるのか、どちらなのでしょう。また、教育・学習・環境など、どの言葉を使うかといった部分がクローズアップされているようですが、日本語も英語も単語の意味自体が、昔通りの意味ではなく、新しい意味でつかわれたり、幅広い意味で使われたりと、人それぞれで解釈も異なっていると思います。ただ、ハッキリしていることは、WEBページで「CIEC(シーク)は、教育と学びにおけるコンピュータやネットワークの利用方法を研究し、その成果を広く伝えることを目的とした学会です。」と表明されている以上、現在、本学会に所属している人は、この文言に納得をして参加されている人ということになりますので、学会名称をどうするという議論の前に、まずは「当学会は、～を目的とした学会です。」の～の部分で今後、どう変えるのかの議論をおこない、共通認識として持てるものを決める事の方が先のような気がします。逆に言えば、そこが固まれば必然的に学会名は絞り込まれるのではないのでしょうか。	私も一般社団法人を運営していますので、すべてのことを会員に問うことが難しいことはわかっていますが、とは言え学会名称の変更という大きな問題であれば、もう少し理事会で議論を重ねるか、重ねた議論の内容を会員に伝えたくて話を進めた方が良かったのではないかと考えています。白紙撤回する必要は無いと思いますが、急いで結論を出さずもう少し多くの意見を聞いたり、議論を重ねても良いのではないのでしょうか。
【その他「アプリケーションがSIECとなる和名がよい】		
1 組織名を変えてもアプリケーションを変えないケースが多い		
【その他「学習協創学会 CIEC:Community for Innovation in Educational Co-Creation」】		
1 ①CIECの名称を残したい。②教育より学習を優先させる ③英語表記では教育を使用することで、学習と教育の表裏関係を暗示したい。④イノベーションのカタカナは長いし、やや流行寄り、なので英語表記に入れる。⑤CIEC:Community for Innovation in Educational Co-Creation	名称変更は、絶対にやらないといけないと思う。ただ、会員の皆さんが親しんでいるのがCIECなので、これをどうにか維持したいと思う。提案がさほど良いとは思わない。単なる1つの提案である。	
【その他「学習教育環境イノベーション学会」】		
1 学習環境イノベーションはいいなあと思ひ、教育と学習とでは、学ぶ側が先の学習教育環境が良いのではと思った次第です。でもいいにくい、、、	CIECは変えずに、英語表記は変えるのでしょうか。	
【その他「3 ≧ 2 > 1」】		
1 理由記載なし		